

コソボ紛争と多民族融和事業から見る 平和建設のためのアイデンティティシフト

暉 峻 僚 三

始 め に

第1章 旧ユーゴスラビアと民族紛争

ティトー時代のユーゴ

ユーゴ紛争まで

ユーゴ紛争：スロベニアとクロアチア

ユーゴ紛争：ボスニア・ヘルツェゴビナ

留意点：誰もが民族主義に染まったのか

第2章 コソボ：ユーゴ時代、紛争、そして紛争後の社会

言語的な差異について

コソボ紛争までの経緯

コソボの地位問題

メンタリティの違い

ミトロビッツ以北に住むセルビア人、以南に住むセルビア人

紛争後の他民族への恐怖感

分断の象徴 コソフスカ・ミトロビツァ/ミトロビッツ

第3章 コソボにおける多民族融和促進事業について

プロジェクトの目的

合宿地と事業対象地について

ローカルスタッフとアシスタント

合宿では何をしたのか

合宿の内容について

事業の成果

むすびに代えて：この事業がやろうとしたことと、北東アジアの平和

始めに

第一次世界大戦後のナショナリズムを研究した研究者であるハンス・コーンは、西欧型と東欧型という2つのタイプのナショナリズムを提起した。

西欧型は、近代の民主主義と主体としての人民の解放運動とその理念を共有するネイションという「理念型」であり、それが中東欧やアジアに波及し、知識人や文学界のファンタジー・文化運動として、東欧型のナショナリズムが始まった。東欧型のナショナリズムは、我々が我々であることの自明性を、歴史や神話と呼ばれる過去の遺産に求めた。東欧型のナショナリズムは、ロシア帝国や、オーストリア＝ハンガリー帝国といった、多民族帝国からの自民族の自立という側面が強かったこともあり、歴史や神話といったファンタジー起源の自民族の規定は、ファンタジーの中の王国の記憶など領域としての最大版図を求め、その領域内の他民族への排他性を促すという傾向を持っている。

このような、「良い市民的・開放的な西のナショナリズム」と「悪いエスニック・排他的な東のナショナリズム」に二分しているようにも見える、コーンのナショナリズム論は、批判を浴びてはいるものの、現在でも一定の説得力を持つ論として生き続けている。

しかし、現実を見るとどうだろうか。コーンが「良い」ナショナリズムの典型として取り上げているような西欧やアメリカでも、東欧型のナショナリズムや、ナショナリズムが、レイシズムにまで悪化しているような、憎悪の扇動が広がりを見せている。

アメリカのトランプ現象は、白人至上主義を彷彿とさせるものであったし、トランプが大統領に就任して以降、民族的・人種的動機によるヘイトクライムは増加した。また、トランプの呼びかけに答えるように、議会を襲撃したことで大きなショックをアメリカ内外に与えた、プラウド・ボーイズも人種主義に抗する市民に対する暴力事件をたびたび起こすなど、白

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト（暉峻）

人・男性至上主義の団体である。

フランスも、排外主義的な極右政党である国民戦線は、その主張を若干マイルドにしてきているとはいえ、今や安定の勢力となっており、前回のフランス大統領選挙でも、国民戦線のルペン候補は1回目の選挙では2位につけた。そして、コロナ禍のパンデミックにより、これらの国でも、国籍を問わずアジア系の人々に対する暴行などヘイトクライムが深刻な問題となっている。

本稿では、コーンの定起するところの「悪いエスニック・排他的な東のナショナリズム」をそのまま体现してしまったようにも見える、ユーゴスラビア崩壊を、コソボ紛争を中心に概観するとともに、筆者が2009-2011年にかけて、コソボで実施した多民族融和の試みを紹介しながら、最後に少しだけ、分断と排除が正当化されてしまいやすい現在、平和を建設するためにはどのような集合的な意識を構築してゆくべきなのかを、提起してゆきたい。

第1章 旧ユーゴスラビアと民族紛争

この論考は、旧ユーゴスラビア時代の連邦制や民族関係が主題ではないが、扱うメインの地域であるコソボで起きた民族紛争や紛争後の社会を知るためには、どうしても、ユーゴ連邦における民族と連邦制、そしてユーゴ連邦におけるコソボ自治州についての大まかな知識は避けて通れない。

この章では、民族関係という視点を主に、ユーゴ紛争までの時代を、筆者が現地滞在中に2008～2011年の間に現地の人々にインタビューした内容も織り交ぜながら、ざっとではあるが概観してゆく。「民族」という語自体、定まった定義があるわけではなく、本稿で用いられる、民族の定義が、普遍的なものだということではもちろんない。

ユーゴスラビア連邦（以下ユーゴ）は、国勢調査で表記されるような、まとまった人口を持つ民族だけでも、20以上を数える、大変な多民族地域

で、スロベニア、クロアチア、ボスニア、セルビア、モンテネグロ、マケドニアという6つの共和国と、セルビア共和国に属するボイボディナとコソボという2自治州からなっていた。そんな超多民族地域であるユーゴでは、多文化主義であろうとする姿勢は、連邦の維持のためにも、重要であり続けた。

ティトー時代のユーゴ

多民族国家であるユーゴは、第2次世界大戦中には、枢軸国側であったクロアチア独立国によるセルビア人、ユダヤ人などの虐殺、セルビア民族主義の旧王党派チェトニックによる、クロアチア人、ムスリム人の虐殺など、凄惨な経験をしつつ、最終的には、反ファシストと諸民族の平等を掲げるティトー率いるバルティザンが勝利し、連邦国家として発足した。発足したユーゴは、戦争中の敵対的な痛みの集合的記憶や、豊かな北部と貧しい南部の経済格差など、さまざまな難しさを内包しつつも、友愛と団結をスローガンに、労働者自主管理や、非同盟外交など、東側ブロックとは違うユニークな社会主義を模索しつつ、1980年代まで、東欧の奇跡と呼ばれる、繁栄を遂げた。また、時代とともに、連邦構成主体への分権化も進められ、1974年の憲法改正では、各共和国と自治州が、連邦においてほぼ同じ発言権を持つ緩い連邦になった。残った、共和国と自治州の最も大きな違いは、共和国は民族自決の権利（連邦からの離脱の権利）が定められていたのに対し、自治州には連邦からの離脱の権利がないことだった。従って、コソボ紛争後の独立問題は、独立の適法性において、他の連邦構成共和国とは違う難しさがある。ユーゴ連邦を構成していた共和国は、連邦からの離脱の権利を行使して独立していったのに対し、コソボには行使すべき離脱の権利が、連邦に対してもセルビア共和国に対しても明記はされておらず、連邦の憲法、セルビア共和国の憲法、コソボ自治州の憲法それぞれで、コソボがセルビアの一部であるとされていた。

顕著な経済発展を遂げたユーゴでは、国民の生活水準も向上してゆき、

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト（暉峻）

連邦構成主体間、民族間の関係も比較的安定していた。旧ユーゴ世代には、この時代を人生で最も豊かで平和だった時として懐かしむ人も少なくない。

経済的発展の遅れていた南部のコソボも例外ではなく、連邦からの潤沢な開発資金の分配などにより、大規模な開発が進められてゆき、人々の生活水準は向上していった。筆者が滞在していた、コソフスカ・ミトロビッツァ/ミトロビッツも、鉛や亜鉛を産出する鉱山と、関連企業が、2万人以上の労働者を擁する産業となり、大きな発展を遂げた。

ファルク・ムイカさん（ミトロビッツ在住 50代前半 副市長）

「ティトー時代のミトロビッツァは、今の町の姿からは想像できないほど豊かで賑やかでした。もちろん、鉱山の町なので、その分公害もすごかったですが。この町は、とても潤っていたので、文化的にも豊かだったし活気がありました。旧ユーゴで文化都市というと、ベオグラードや、ザグレブ、サラエボを想像する人が多いですが、ミトロビッツァもすごかったです。常にユーゴで一番の劇を上映し、一番のバンドが演奏していました。」

ドラガン・ミレンコビッチさん（コソフスカ・ミトロビッツァ在住 50代後半 医師）

「ティトー時代のミトロビッツァは、安心感が今とは全然違っていました。今のミトロビッツァは、ほぼ無法地帯で油断ができませんが、昔は違っていました。若い頃は、私も、友人も、飲みすぎて、道で寝てしまうことがよくありました。でも、誰一人として、何か盗まれたり、ひどい目にあったりしませんでした。それほど安全だったのです」

ユーゴ全体が安定した経済成長を遂げているうちは、多くの人が豊かさを享受し、多民族性を誇りにもしていたが、友愛と団結のシンボルでもあっ

たカリスマ指導者のティトーが1980年に死去し、その後経済が悪化してゆくと、連邦構成主体間の関係、そして、民族関係もギクシャクしてゆく。

筆者は、現地で旧ユーゴ世代の人々に、ティトーが死んだ時のことを聞いてみた。ほぼ共通している答えは、「心から泣いた」ということと、「大きな不安を感じた」という2点であった。

ミルサド・タロビッチさん（コソフスカ・ミトロビツァ在住 50代後半
税関職員）

「ティトーが死んだ時のことは、鮮烈に覚えています。通りではみんな泣いていました。私も泣きました。なんで泣いたかって？ もちろんティトーへの尊敬からという部分もありましたが、一番大きな理由は、なんとも言えない不安でした。これから何が起ころんだらう、これからきっと悪いことが起ころに違いないというような底知れぬ不安から、泣いたのです。そして、その不安は杞憂ではありませんでした。実際その後、大して時間がかからずひどいことになりました。」

1980年代に入ってユーゴスラビア経済は悪化していった。

1985年には、ユーゴ全体で失業率は過去最悪の16%に、対外債務は1億9,000万ドルに達した。ディナールの価値は暴落し、1989年には2500%というハイパーインフレが起き、生活水準は一気に落ち込んだ。

連邦構成主体間や民族関係も、敵対的なものになっていった。特に経済的に貧しい南部地域と、豊かな北部地域が対立するようになった。

各共和国・自治州は、その経済力に応じて連邦に分担金を納めていたが、豊かな北部、特にスロベニアやクロアチアは、分担金が自分たちの地域ではなく、南部の貧しい地域の開発資金としてばかり流れていくことに不満を募らせていった。実際、ユーゴにおいて、最も発展が遅れていた地域であったコソボでは、支払う分担金よりも遥かに多くの開発資金を連邦から受け取っていた。

経済状況が悪化し、分配するパイが小さくなってくると、自己責任論が幅をきかせるようになり、社会が、「誰のせいか」という悪者を必要とするのは古今東西、世界共通である。こうして、他の共和国や民族、連邦を悪者とする、自民族中心主義や、豊かな共和国の連邦からの分離独立の傾向が強まっていった。このような自民族中心主義の高まりは、1990年に行われた、初の複数政党による選挙結果に大きな影響を与え、自民族中心主義的な政党が多くの共和国で勝利した。

ユーゴ紛争まで

ユーゴ崩壊の直接的なきっかけとなる節目の暴動は、1981年にコソボで起きた。コソボのプリシュティナで、大学生が学食を破壊することから始まった暴動は、その後アルバニア系住民を巻き込みコソボ全土に規模を拡大していった。暴動では、「資本主義よりも社会主義を」という自由化への反対以外にも、コソボ自治州の共和国ステータスへの昇格や、「我々はアルバニア人であり、ユーゴ人ではない」といったアルバニア民族を強調するスローガンも掲げられた¹⁾。(ユーゴスラビアは、ユーグ(南)+スラビア(スラブ人の場所)という意味であり、アルバニア人は南スラブ系ではない。)

この暴動は連邦政府によって鎮圧されたが、鎮圧後、コソボでは、セルビア系住民に対する暴行、強姦、放火などが頻発するようになり、コソボから避難するセルビア人が増えた。

この状況を利用し、のし上がってきたのが、スロボダン・ミロシェビッチである。セルビアの共産主義同盟幹部だったミロシェビッチは、「アルバニア人に差別を受けるコソボのセルビア人を守る」政治家として、セルビア世論を扇動し、87年にはセルビア共和国トップの幹部会議長に就任した。

ミロシェビッチは、コソボの分離独立の動きへの批判、コソボでは少数派となるセルビア人の権利保護を訴え、共和国憲法を修正し、コソボの自

1) 柴宜弘、ユーゴスラヴィア現代史、岩波新書 1996 P137

治権 = 自治州の自治権を剥奪した。一方、連邦においては自治州が、幹部会に代表を出すステータスに変わりはなかった。つまり、ミロシェビッチは、自分の子飼いを、コンボ、そしてもう1つの自治州であるボイボディナの代表として指名できるようになり、ユーゴ連邦の意思決定において、実質的に1共和国と2自治州の3票の力を持つこととなった。このことは、結果として北部の2共和国の分離独立傾向を加速させることにつながった。そのまま連邦にとどまることは、セルビアに支配された連邦にとどまることになるからである。

ユーゴ紛争：スロベニアとクロアチア

90年に初めての複数政党制の選挙が行われ、セルビアとモンテネグロを除く各共和国で、連邦をさらに緩い連合にする主張や自民族中心主義的な主張をする政党が勝利すると、ユーゴ連邦は崩壊に向けた動きを加速させていった。さらに緩い国家連合に、ユーゴ連邦を組み替える道も模索されたが、91年6月には、北部の2共和国、スロベニアとクロアチアが独立宣言を採択し、ユーゴ崩壊が始まった。スロベニア人の人口比率が圧倒的に高く、武力衝突への十分な準備もしていたスロベニアは、ユーゴ連邦軍と91年6月末から散発的な戦闘を行ったが、わずか10日間程度で勝利し、7月7日には連邦軍がスロベニアから完全に撤退、10月には連邦から正式に独立した。スロベニアに比べると人口の12%ものセルビア系住民が居住するクロアチアも、スロベニアと同時に民族自決権に基づく独立を宣言したが、国内のセルビア系住民は反発、武装した住民とクロアチア警察の間で武力衝突となり、のちに連邦軍も介入、クロアチアと連邦の武力紛争になった。クロアチア紛争は、1991年から1995年の間、凄惨な武力紛争となり、国境を接するボスニア紛争も引き起こすことになった。

1991年11月に一旦停戦合意が成立、国連保護軍が駐留したが、その期間も、完全な小康状態とはならなかった。また、クロアチアは、隣のボスニア内戦のクロアチア人武装勢力を支援するなど、武力紛争への介入を行っ

た。95年になると、一気にセルビア人の多住地域である、ボスニア国境沿いに軍事攻勢をかけ、大量の難民を発生させた。この軍事攻勢により、武力紛争は終結へと向かった。残った、セルビア人多住地域である、セルビアとの国境沿いの東スラボニアも、96年からの国連暫定統治を経て、98年1月にクロアチアに施政権が返還され、クロアチアの独立紛争は終結となった。

ユーゴ紛争：ボスニア・ヘルツェゴビナ

1992年4月に、ボスニアの独立を巡って民族間で武力衝突が勃発した。武力紛争は、ボシュニャック武装勢力、トウジマンのサポートを受けるクロアチア人武装勢力、そして、ミロシェビッチのサポートを受けるセルビア人武装勢力の間で、3年半以上続き、死者20万人、難民・避難民200万人を出す、第2次世界大戦後ヨーロッパで最悪の武力紛争となった。

ユーゴ連邦において複数政党制の自由選挙が行われると、圧倒的多数の民族がいないボスニアにおいては、民族比率をほぼそのまま反映させた選挙結果となり、1位はボスニア人政党、2位はセルビア人政党、3位はクロアチア人政党という結果となった。

一旦は、ボシュニャックの大統領、セルビア人の議会議長、クロアチア人の首相という権力分散により、新たな体制で、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国が滑り出したかに見えたが、クロアチア紛争の影響で、ボスニアでも民族関係が悪化し、この権力分散の合意は崩壊した。

92年初めには、独立を求めるボシュニャク人とクロアチア人勢力と、ユーゴへの残留を求めるセルビア人勢力の間で、妥協点は見出せなくなっていった。イゼトベコビッチが率いるボスニア政府は、連邦からの独立を問う住民投票を行い、セルビア系住民がボイコットしたことで、投票の99%が独立に賛成となり、3月3日に独立を宣言した。

ボスニアの武力紛争は、セルビア人武装勢力対独立を宣言したボスニア政府軍や武装勢力という構図で始まった。のちに、この構図は、セルビア

のミロシェビッチと、クロアチアのトウジマンが、ボスニアの分割を密約したことで変わっていった。ボスニアのクロアチア系勢力は、独立には賛成票を投じたものの、ボシュニャック系を中心とする独立派とは一枚岩ではなく、クロアチアから、軍事的にも資金的に援助を受け、クロアチア人民共和国の樹立を目指した。セルビア人勢力は、ボスニア・セルビア人民共和国の樹立を、クロアチア人勢力はヘルツェグ・ボスナ・クロアチア人民共和国の樹立を宣言し、既に独立を宣言したボシュニャック系を中心とするボスニア政府系の武装勢力も含め、ボスニアでは三つ巴の紛争が泥沼化していった。実質的にセルビア軍となっていたユーゴ軍も、セルビア系住民の保護を口実に介入した。紛争はセルビア人勢力が優位で、ボスニアの7割をセルビア系武装勢力が支配、イゼトベコビッチ率いるボスニアの首都、サラエボも包囲され、多くの非戦闘員が死傷した。

ECやアメリカを中心とする国際社会は、包囲されたサラエボへの人道支援や、セルビア人勢力の背後にいるユーゴへの制裁を科したが、セルビア人勢力の軍事的な優位は動かなかった。

ボスニア紛争は、国際世論、特に西側世論を味方につけるためのメディア戦争としての一面もあり、こちらは、独立派が勝利した。ボスニア紛争では、民族浄化 (Ethnic Cleansing) という言葉が広く用いられたが、この言葉は、セルビア人勢力による蛮行を非難する際にセットとして使われることが多かった。1992年には、イギリスのテレビで、セルビア人勢力の強制収容所にいる痩せ細ったボシュニャックの捕虜たちの姿が報道され、西側の世論に衝撃を与えた。追放や虐待、殺害といった行為は、実際には3つの勢力とも行っていたが、西側の世論では、セルビア人勢力と、背後にいるミロシェビッチのセルビアばかりが悪玉となっていった。

ECや国連は、4度にわたる調停、国連保護軍の派遣、人道援助の支援や、安全地域の監視を行うなど、武力紛争を終結に持ってゆこうとしていたが、うまくはいかなかった。

94年に入ると、アメリカはボシュニャック人勢力と、クロアチア人勢力

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト(暉峻)

サイドに立ったボスニア紛争への介入を、強めていった。アメリカの仲介により、ボシュニャック人勢力、クロアチア人勢力で連邦国家が作られることが合意された。

アメリカの主導するNATOは、94年11月からセルビア人勢力への空爆を行うようになった。

NATOの空爆により、セルビア人勢力は弱体化していった。空爆への対抗手段として、セルビア人勢力は、現地に展開する国連保護軍の兵士を人質として盾に使ったが、西側世論から一層の非難を浴びた。

95年は、短い停戦期間を経て、最後の悲惨な戦闘が行われた年だった。セルビア人勢力は、それまで、ボシュニャック人勢力圏内だった街も占領。その中でも、7月のセルビア国境近くの人口が4万人にも満たない町、スレブレニツァ占領は、残虐なものだった。スレブレニツァでは、約8000人もボシュニャックが武装したセルビア人武装勢力に虐殺された。被害者の大半は成人男性だったが、女性や子どもも虐殺された。スレブレニツァは国連により安全地帯に指定されており、国連PKO部隊がいたが、虐殺を止めることはできなかった。

ボシュニャック側の首都、サラエボも激しい攻撃にさらされた。8月には国連の安全地帯に指定されていた市場を砲弾が襲い死傷者を出した。

NATOは、一連の動きに対し、ボスニア紛争中最大規模の空爆を行った。この空爆により、セルビア人勢力は戦闘継続が困難になり、10月に最後の停戦が実現した。

悲惨な武力紛争は、実質的にはNATOの武力介入によって終結した。1995年11月、アメリカの仲介で、デイトン空軍基地において和平合意が成立したが、和平交渉に招かれた3民族の代表は、ボシュニャックのイゼトベコビッチ以外は、セルビア(スルブスカ共和国ではない)のミロシェビッチ、クロアチアのトゥジマンと、ボスニア外の政治家だった。

和平合意は、ボシュニャックとクロアチア人が主要民族となる「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」が51%の領域を、セルビア人が主要民族となる

「スルプスカ共和国」が49%の領域を管轄する、極めて緩い連邦国家となることとされた。これは、現在のボスニアの形と同じである。

留意点：誰もが民族主義に染まったのか

ユーゴ崩壊の過程を見ると、つい、旧ユーゴの人々全てが、帰属意識を持つ民族アイデンティティを振りかざし、他の民族と敵対していったようなイメージを持ってしまいがちになる。もちろん、そのような人々はいたし、政治リーダーたちも自民族の被害者性や偉大さ、他民族への敵対心を煽っていた。しかし、旧ユーゴにおいて、人々が一斉に自民族中心主義に雪崩を打っていったわけでもない。

ユーゴスロベンカ（Jugoslovenka=ユーゴスラビア人）という旧ユーゴ時代の大ヒット曲がある。ユーゴスロベンカは、ボスニア出身の歌手レパ・ブレーナがユーゴ崩壊の危機が高まっていた1989年にリリースした曲で、モンテネグロの歌手ダニエル、クロアチアの歌手ヴラド・カレンベル、ボスニアのアレン・イスラモビッチとともに歌い、旧ユーゴで空前の大ヒット曲となった。歌は1～3番をダニエル、カレンベル、イスラモビッチが歌い、それぞれに應える形で、サビをブレーナが歌っている。

繰り返されるサビは；

私の目はアドリア海
私の髪は、パンノニア²⁾
私の姉妹はスラブ人
私はユーゴスラビア人

である。1～3番が「その美しい娘さん……」のようなナンパフレーズ

2) パンノニアは中欧から旧ユーゴ一帯までを含む、ローマ帝国時代の地域の名前

になっているので、このようなサビの歌詞になっているのだが、アドリア海からバルカン内陸部までが1つのユーゴというアイデンティティが歌い上げられている。89年という時期において、自らの立ち位置をはっきりと主張する歌をリリースするのは、それなりに勇気と思い切りが必要だったと思われるが、注目すべきは、この時期にユーゴスラビア性を強調する曲がリリースされ、それが空前の大ヒットとなったことである。

ブレーナ自身は、民族的背景はボシュニアクだが、活動の拠点、居住地ともセルビアの首都（当時はユーゴ連邦の首都でもあった）ベオグラードであり、ユーゴ崩壊の過程では、ほぼ全ての自民族中心主義的な政治空間やメディア空間から裏切り者として扱われた時期もあったという。そして、ユーゴ崩壊は、ブレーナが故郷に帰ることも困難にした。

2017年にボスニアの雑誌インタビューで、ブレーナは当時のことを振り返って述べている。「91年～96年の期間、私は旧ユーゴのほぼ全域で禁止される存在になりました。なぜなら、私はユーゴスラビア人でいたからです。旧ユーゴ時代は、ほとんどの人々がユーゴスラビア人であることに誇りを持っていたというのに。突然、人々は、民族や宗教で線を引いて自己主張し始めました。でも、私は変えることができません。私は60年代に私が生まれた時代の私なのです」³⁾

3) IKONA OSAMDESETIH

Lepa Brena: U Jugoslaviji smo imali manje para, ali smo bili sretniji i mirniji spavaliを筆者訳

https://www.klix.ba/magazin/muzika/lepa-brena-u-jugoslaviji-smo-imali-manje-para-ali-smo-bili-sretniji-i-mirnije-spavali/170426036?__cf_chl_jschl_tk__=pmd_Nh9rU1Hioknq6AE5n6mx3k9lFJc1UmF7s9cWfgHSdQQ-1630472056-0-gqNtZGzNAqWjcnBszQd9

第2章 コソボ：ユーゴ時代、紛争、そして紛争後の社会

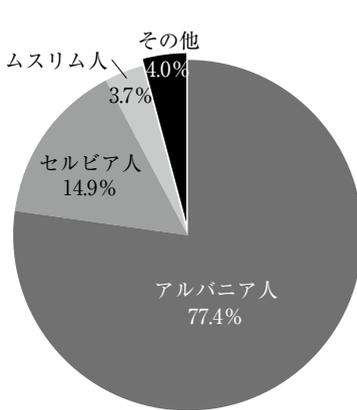
前述の通り、コソボは、ティトーの死後、分離独立を求める暴動が起きた、初めての地域だったが、武力紛争は、最後に起きた地域である。(マケドニア紛争の方が遅いが、マケドニア紛争自体、コソボ紛争ゆえに起きた武力紛争であり、本稿では概観しない。)

「私たちにとってのコソボは、あなたにとっての京都です。京都が日本から独立するなんて、受け入れられますか？」コソボの分離独立に反対するセルビア人が筆者にいう決まり文句である。コソボと、セルビア南部は、中世セルビア王国発祥の地であり、現在でもその時代から続くセルビア正教の修道院や教会が点在する地である。そして、オスマントルコとの戦いで敗北し、オスマントルコの支配を受けることになった、「コソボの戦い」の舞台でもあり「民族の悲劇」の地でもある。セルビア人にとって、コソボが特別である所以だ。

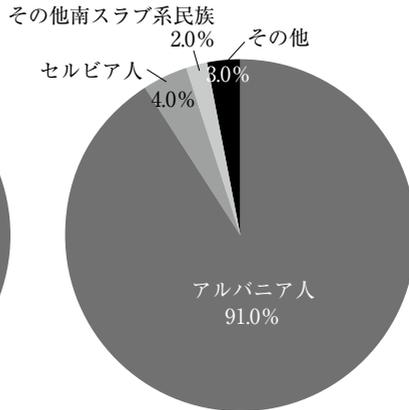
セルビア人にとって、思い入れの強いコソボだが、セルビア人が多数を占めている地域ではない。17～8世紀にオスマントルコの政策で、多くのムスリムのアルバニア人が入植し、コソボにおける最大民族となった。そのような歴史経緯もあり、隣国アルバニアでは、正教やカトリックなどキリスト教徒のアルバニア人が比較的多いのに対し、コソボのアルバニア人はその多くがイスラム教徒である。

コソボ紛争に関する報道を見ると、つい、コソボにはアルバニア人とセルビア人しかいないようなイメージを持つが、コソボは、岐阜県と同じくらいの大きさしかない地域(コソボをどのように呼ぶかは、コソボ独立に関する立場を表す。国と呼べば、独立に賛成している立場になり、自治州と呼べばセルビア側の立場を支持することとなる。そのため、筆者は地域という言葉を使う)だが、アルバニア系、セルビア系以外にも様々な民族が暮らしている。ボシュニャック、トルコ人、ロマ人などが主要な民族だが、他にも南スラブ系だがイスラム教徒であるゴーラ人、ロマ系だが母語がロマニー語ではなくア

旧ユーゴ時代(1981年)のコソボ民族構成 2011年のコソボにおける民族構成



(コソボ政府発行のDemographic changes of the Kosovo population 1948-2006のデータより筆者作成)



(コソボ政府発行のASK Agjencia E Statistikave Te Kosoves, ESTIMATION of Kosovo population 2011のデータと、収録されているOSCEが2009年にミトロビツァ以北に対して行った人口調査をもとに筆者作成)

ルバニア語のアシュカリ人、エジプト人、モンテネグロ人、クロアチア人などが暮らしている。

言語的な差異について

ユーゴにおいては、安定した民族関係の実現は、連邦の維持発展に不可欠であり、そのためにも、多文化主義は重要であり続けた。旧ユーゴの時代には、民族語で教育を受ける権利、民族語メディアの権利が保障されており、1970年には、アルバニア語で高等教育を受けられる機関として、コソボの首都プリシュティナに大学も設置されている。

学校教育においては、アルバニア人の生徒は、連邦の公用語であるセルボクロアチア語が必修であった。このため、旧ユーゴ時代に学校教育を受けた世代のアルバニア人は、アルバニア語はもちろんのこと、セルビア語

も話す人が多い。

一方、セルビア人など、セルボクロアチア語が母語である人々は、学校教育でアルバニア語が必修となっていた。セルビア語を話す旧ユーゴ世代のアルバニア人ほどではないが、やはり旧ユーゴ世代のセルビア人は、アルバニア語をある程度話せる人が多い。(育った環境によるところが大きく、アルバニア人が多い場所で育った人は、バイリンガル並みに話す、セルビア系が多い地域で育った人は、片言レベルの人が多い。)

この2言語政策は、全ての共和国・自治州で共通のものであったが、コソボでは、他の地域よりも実践には難しさが伴った。理由は言語の距離である。

連邦を構成する共和国で、セルビアとクロアチア、ボスニア、モンテネグロは、連邦公用語セルボクロアチア語が普段使っている言葉であり、2言語政策は、話し言葉としては実質的にあまり意味はない。書き言葉としては、セルビアとモンテネグロはキリル文字を使い、クロアチアやボスニアのセルビア系ではない住民は、ラテンアルファベットを使うという文字の差はある。スロベニア語はローマ字を使う南スラブ系の言葉であり、マケドニア語は、キリル文字を使う南スラブ系の言葉である。つまり、スロベニア語もマケドニア語も、セルボクロアチア語との距離は大変近く、それぞれの話者は容易にセルボクロアチア語を習得できる。また、仮に習得できなくとも、筆者の感覚では、スロベニア語とセルボクロアチア語の話者、マケドニア語とセルボクロアチア語の話者の間でコミュニケーションはある程度成立する。

スロベニア人やマケドニア人にとってのセルボクロアチア語と、コソボのアルバニア人にとってのセルボクロアチア語は、言語的な距離感が全く違い、アルバニア人がセルボクロアチア語を習得するには、かなり努力を要する。また、同じくセルビア人やボシュニャック(当時はムスリム人)にとって、アルバニア語を習得するのも、かなり努力を要する。

このような地域で、「意思疎通する努力」を怠ってしまえば、お互いの

コミュニケーションは困難になる。そして、ミロシェビッチがコソボの自治権をほぼ剥奪した89年からは、剥奪した権利の中に、公空間におけるアルバニア語の使用も含まれ、学校教育、高等教育でアルバニア語が使われなくなってしまった。当然、圧倒的多数を占めているアルバニア系の住民は反発した。アルバニア系住民は、非公式の住民投票を実施、コソボ共和国の樹立を宣言し、コソボのアルバニア人勢力のリーダーであったイブラヒム・ルゴバを中心に、独自の非公式の教育施設や病院の軍営などの非公式行政を実施し始めた。ちなみに、現在のコソボで、アルバニア系住民は、この時代に学齢期だった世代のことを、「地下学校世代」と呼ぶ。

90年代からは、お互いの言葉を学ぶこともなくなり、例えコミュニケーションを取りたくとも、もはや相手の言っていることは理解できない。敵対感情があり、コミュニケーションが取れない状態で、日々顔を見る距離には暮らしているという環境で入ってくる情報は、相手側に関する悪い噂が大半を占める。そして、実際のコミュニケーションがないだけに、ちょっとした悪い噂は、すぐに暴動に発展する。例えば2004年に、4人のアルバニア系の子どもが、セルビア系住民が多数を占める地域の川で溺れ、3人が死亡するという出来事があった。この出来事は、「セルビア人の村に入ったアルバニア人の子どもに、セルビア人が犬をけしかけ、川で溺れさせた」という噂となり、たちまちコソボ全土に広まり、アルバニア系住民による、セルビア系住民やロマに対する大規模な襲撃に発展した。コソボには紛争後、NATOを主体とする多国籍の平和維持軍が展開しているが、この時は、暴動の拡大を抑えることができなかった。

しかし、きっかけとなった事件の状況を見れば、簡単に嘘であることがわかる。アルバニア系の子どもが入ったというセルビア人の村から、溺れたという川まで、かなりの距離があり、冷静に考えれば特定の子どもに集中して、長距離を追跡できる犬が一般の家庭に都合よく飼われている確率は低いのだが、そのように冷静に考えられないのが、断絶の怖さである。後日、生き残った1人の子どもが、インタビューしたメディア関係者

と両親に「セルビア人に川に追い込まれて溺れさせられた」と答えるように言われていたことが、国連の派遣する警察の調査で判明した。

コソボ紛争までの経緯

1974年憲法のもとでコソボは、大きな民族的自治権を獲得していたが、ティトの死後81年、市場主義への反対とともに、分離独立を求めるスローガンや、共和国ステータスへの昇格を求めるスローガンを挙げた大規模なデモが再び起き始めた。分離独立や、民族自決権を持つ共和国ステータスを求める要求は、アルバニア人は南スラブ人ではない、コソボは南スラブの場所ではないという主張にもなり、必然的に、民族間の対立感情を煽ることになった。

80年代を通じて、民族的な対立は、圧倒的な多数者であるアルバニア系住民による、セルビア系住民への暴行や追放、そしてその報復と言う悪循環を加速させ、コソボからセルビア本土に移り住むセルビア人も増えていった。この状況を最大限利用したミロシェビッチは、コソボの自治権を剝奪した。反発したコソボのアルバニア系住民は、自主投票を実施し、共和国の樹立を宣言するとともに、イブラヒム・ルゴバを大統領に選んだ。ルゴバは、セルビア側と交渉しながら、自治権の回復や、共和国への昇格を目指す路線をとったが、アルバニア語を使用しての公教育の復活すら回復はできず、次第に独立を全面に打ち出すようになった。また、ルゴバはコソボのアルバニア人社会全体を統率できていたわけではなく、独立が進まないことに不満を持つ勢力が、コソボ解放軍(KLA)を設立、セルビア警察との武装闘争を繰り返すようになった。当初、アメリカはKLAをテロリストグループとして扱っていたが、1998年からは、“パートナー”として扱うようになり、CIAを中心に資金や物資、軍事トレーニングの供給を行った。

武装闘争が進むにつれ、コソボ独立へ向けた動きの中心は、対話路線のルゴバから武装闘争路線のKLAへと移っていった。

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト (暉峻)

KLAは、当初、散発的にセルビア当局の警察や、役人を襲撃するテロを繰り返し、セルビア当局はその度に、怪しいものは全て逮捕する報復的な対応を繰り返した。

98年の2月末から、セルビアの治安部隊は、KLAメンバーの多くの出身地域であり、最も襲撃が活発だったドレニツァ渓谷地域で、大規模な掃討作戦を実施、それ以来、セルビア当局とKLAの間の大規模な武力紛争となった。

7月にKLAは、オラホバツ/ラホバツを占領したが、近隣の村のセルビア人男性を拉致・殺害する事件が起き、その後ベリカ・ホチャ/ホチャ・エ・マデでも同様の事件が発生した。セルビア治安部隊と、セルビアとモンテネグロからなるユーゴ軍はKLAに対する攻撃を本格化させていった。

紛争は泥沼化し、武力行使の規模も大きくなっていった。1998年10月には、一旦停戦が合意され、OSCEのコソボ査察団が和平監視を行った。しかし、すぐに殺害や追放、誘拐、レイプなど民族間の暴力の応酬が復活し、12月にはKLAが戦闘を再開した。戦闘中、双方とも残虐行為を行ったが、クロアチア紛争、ボスニア紛争と既にセルビア悪玉論が支配的になっていた国際社会、特にアメリカを中心とする西側は、セルビアを非難することが多かった。そんな中、翌99年1月にコソボ中央部に位置するラチャック村で45人のアルバニア人が殺害される事件が起きた。OSCE主導のコソボ検証ミッションの現場検証の様子は、テレビでも放映され、アメリカのウォーカー検証団団長は、殺害された遺体のそばを歩いている場面を織り交ぜながら、この遺体を、セルビア治安部隊による虐殺と断定し、ユーゴとセルビアを強く非難した。

この事件の放送は、NATOがコソボ紛争に軍事介入する大きな一歩となった。3月末に、NATOは、「人道的介入」としてコソボも含むユーゴに対し空爆を開始した。NATOの軍事介入は、国連の決議を経ずに行われたため、現在でもその正当性には議論がある。

空爆は、主に、兵器や軍の施設をターゲットとしていたが、ドナウ川に

かかる橋や、民生品を生産する工場、放送局、鉄道なども攻撃した。NATOの攻撃には誤爆もあり、アルバニア人難民を乗せた輸送車列や中国大使館も誤爆された。

NATOによる空爆で、紛争が収まったかという点、むしろ逆だった。78日にも及ぶ空爆中、セルビアはKLAの掃討作戦を強化し、空爆からの避難も含めると、85万人ものアルバニア系住民が難民・避難民となった。

ユーゴは6月に欧米7カ国とロシアによる和平案を受諾、長く続いた紛争はようやく一応の終止符が打たれた。しかし、6月の和平の後には、アルバニア人による報復が続き、紛争後に20万人以上の非アルバニア系住民が難民となった。非アルバニア系、特にセルビア系住民の帰還は、現在もほとんど進んでいない。

和平案に基づき、コソボは国連の暫定統治下に入り、NATOを中心とする平和維持軍(KFOR)が展開した。紛争の終結に伴い、大きな人口の移動が起きた。紛争終結後、アルバニア系難民の多くがコソボに帰還した。また、コソボ内に留まったセルビア系の住民も、多くが、ミトロビツァ市以北に移り住んだ。元々暮らしていた場所に残ることを選んだセルビア系住民は、コソボ全土に点在する飛地で、KFORに警護されながら、暮らしている。

コソボの地位問題

国連暫定統治下のコソボで初めての議会選挙が行われ、ルゴバが初代大統領に就任、2002年に治安、対外関係、少数者の権利の保護、エネルギー政策を除いて、主な施政権は現在のコソボ当局に委譲された。

コソボの地位を巡る調整は、難航し、2006年の初めてのセルビアとコソボの会合や、国連事務総長特使による調停の努力が続けられたものの、自治州としてのコソボと、独立したコソボという大きな立場の違いを埋めることはできなかった。2008年に、セルビアとの合意がないまま、ついにコソボは独立を宣言した。この時期、筆者はコソフスカ・ミトロビツァ /

ミトロビツ市に滞在していたが、セルビア人の居住地域である市北部では、コソボの独立を早々と承認したアメリカや、日本の国旗が燃やされているなど、きな臭い空気が漂っていた。一方アルバニア人の居住地域である南部では、日本人だとわかると、とても愛想良くされることが多かった。セルビアは、独立宣言自体を、国際法違反であるとして、国際司法裁判所に訴

現在のコソボにおける
セルビア系住民の多住地域



（筆者作成）

えていたが、裁判所の勧告は、「違法であるとは言えない」というものだった。ただ、これで当局間のチャンネルが全くなくなったわけではなく、EUの仲介のもと、関係正常化への交渉自体は続けられている。

2012年には、セルビアのタジッチ首相（前）と、コソボのサチ首相（前）が直接会合し、2013年には、「関係を正常化してゆくこと」では合意を見た。合意の中には、ミトロビツァ以北の警察を、自律したものとして扱ったまま、組織上はコソボの行政の枠組みに組み入れられることも含まれており、これまで無理やりな実力行使以外には、ミトロビツァ以北には及ばなかった、コソボ当局の警察権が、制度上コソボ全土をカバーすることとなった。

2015年には、関係の正常化と引き換えに、セルビアのEU加盟を加速させるという条件を含む「EUとコソボの安定化・連合協定」が署名されたが、ミトロビツァ以北の住民は当然、強く反発しており、ミトロビツァの北部と南部を隔てるイバル川にかかる橋が、バリケードで塞がれるなど、新たな「分断の安定期」に入った感がある。

現在、セルビア当局とコソボ当局の間で、浮上している案にミトロビッツァ以北をセルビアに割譲、セルビアは、セルビア本国内の、アルバニア人が多く暮らすブレシエボをコソボに割譲するというものもあるが、どちらも、1つの民族だけが暮らしているわけではなく、割譲した際に、強制的な移住、新たな暴力の応酬になる可能性が低くない。例えば、ミトロビッツァの北側には、川の近くを中心に、一定数のアルバニア系住民が暮らしている。彼らが追放のターゲットとなる可能性は低いものではないし、その報復として、ミトロビッツァ以南に点在する飛び地で暮らす、セルビア系住民が追放のターゲットとなることも十分にありうる。

メンタリティの違い

ミトロビッツァ以北に住むセルビア人、以南に住むセルビア人

南の共存の象徴 シュトゥルプツェ / シュタルプツァ オラホバツ / ラホバツ

一般化できるようなものではないことを承知の上での話にはなるが、コソボのセルビア系住民のメンタリティは、ミトロビッツァ以北と、以南ではだいぶ違う。以北ではセルビア人という民族への帰属意識が最大で表面にくる属性であるのに対して、以南は民族への帰属意識もありつつ、地域への帰属意識が非常に大きい。飛び地に留まっているセルビア系住民の多くからは、政府が変わろうとも、自分の地域で暮らしていくのだという覚悟のようなものを感じる。

ブラチスラフ・コスティッチ(ブチトルン / ブチトリ在住 50代後半 教師)

私は、ここブチトルンで生まれ育ちました。小さな頃から、周りにはアルバニア人が多く、一緒に遊んだのも、主にアルバニア人でした。だから、私は、アルバニア語もセルビア語と同じくらい話せます。周りと、民族のことで揉め事を起こしたことはありません。

私は、生まれてから一度も引っ越したことはありません。でも、5

回も違う国籍になっています。最初はユーゴスラビア、次は新ユーゴスラビア、セルビアモンテネグロ、セルビア、そしてコソボです。私にとって、国などというものはそんなもので、ここで普通に暮らして行けることの方が大事なのです。

ミトロビツァ以北のセルビア人は、日常生活は北部の中で完結するし、大きな街に出る時は、さらに北に行けばセルビア本国はすぐである。しかし、南部の飛び地は全く事情が違う。アルバニア人への敵対感情をむき出しにしたまま、南部の飛び地で暮らすことはできない。近所に日々の買い物に行けば、お店は店員も客も圧倒的にアルバニア人の比率が高い。接触を避けようとするれば、わざわざ、日用品を買いにコソボ北部まで行ったり、セルビア本国やマケドニア、モンテネグロまで、パスポート持参で行かなければならないことになるからだ。上記のコスティッチさんのように、アルバニア語が堪能なセルビア人は、南部の飛び地でもそれほど多いわけではないが、それでも、やはり国や政府といったものへの、さめた感覚を共有している人はミトロビツァ以北よりもはるかに多い。また、ユーゴ時代に近所同士の関係が、親密であり、紛争中も、民族同士の対立に飲み込まれずに、お互いに守り合っていたという話も、飛び地に残っているセルビア系住民や、混住しているアルバニア人からよく聞いた。

ミランダ・ルゴバ (ベチ/ベヤ在住 30代前半 会社員)

私の地元は、セルビア人とアルバニア人が隣り合って暮らしていました。紛争中のことは、親からよく聞きます。隣のセルビア人の家族とは仲が良かったそうです。セルビアの警察部隊や軍隊が来るときは、お隣が知らせてくれました。逃げるときは、大事なものは隣に預けました。KLAが来るときは、逆のことをしました。その家族は、今はもう引っ越してしまいました。外国人は、アルバニア人とセルビア人みんなが憎み合っていたと思いがちですが、そうではないこともある

のです。

民族紛争という大きな痛みの集合的記憶を抱えつつも、なんとか共生している街もある。アルバニア系住民が多数を占めるオラホバツツ/ラホバツツは、ワインの製造で有名な町である。紛争前は、人口の1割弱がセルビア人だったが、紛争後は3%ほどになっている。この地方の言葉は独特で、アルバニア語にセルビア語の単語を混ぜて使う。また、セルビア語にもアルバニア語の単語を混ぜて使う。（オラホバツツ/ラホバツツ語と呼ばれることもある。）アルバニア人はムスリムが多いが、この地域では、お酒を飲む人も多く、自家製の焼酎を作っているアルバニア人も多い。お酒作りには、多くの工程があるため、協働しやすいということもあるのだろうが、一緒に何かをしても、変な目で見られることもなく、カフェなどで、セルビア系とアルバニア系の住民が一緒にいる所は、珍しい光景ではない。ただ、人口バランスの変化とともに、オラホバツツ/ラホバツツ語は徐々に消えていっており、いつまでこのような光景が続くかはわからない。コソボ・マケドニア国境に近いシュトゥルプツェ/シタルプツも、アルバニア系とセルビア系と一緒にいても、変な目で見られない地方である。この地方は、セルビア系がアルバニア系の倍程度暮らしている地域で、リゾート地である。オラホバツツ/ラホバツツのように、独特な方言があるわけではないが、お店に入るときに、「どっち系」かを気にする人はあまりいないし、民族色を強調したような看板やシンボルも見かけない。

紛争後の他民族への恐怖感

アルバニア系住民とセルビア系住民が共生している例も前出のようにあるし、ミトロビツァ/ミトロビツツ以南で飛び地に暮らすセルビア人の中には、コソボの地位がどうなろうと、その地で暮らして行けば良いという人も少数だがいる。

しかし、コソボのセルビア系住民の多くは、独立を宣言した現在のコソ

ボ当局に対して少なからぬ警戒感、恐怖感を抱いている。これは全く根拠のない妄想とも言えない。

アルバニア民族の国としてのコソボを標榜する武装勢力だったKLAは紛争後、政府と一体化している。コソボの前首相であるハシム・サチはKLAの政治部門の元リーダーであり、所属政党のコソボ民主党の前身はKLAの政治部門である。警察にも、元KLAのメンバーがスライドして入っており、いくら憲法がセルビア語も公用語として規定し、少数民族の権利を規定し、大アルバニア主義に基づいたアルバニアとの併合を求めないと謳っていても（憲法1条3項では、他国またはその一部について領土的要求を行ったり併合を求めたりしないことになっている）、武力紛争の記憶がまだ生々しいだけに、セルビア系住民としては、とても信用する気にはならないだろう。実際にミトロビツァ以北のセルビア系住民は、以南には行きたがらない。飛び地を訪ねる、修道院や教会などセルビア正教の施設を訪れる、マケドニアやセルビア南部に行くために通り抜けるなど、必要があれば行くが、ミニバスや自家用車で目的地までなるべく止まらずに行く。

前述のように、多民族国家としてのコソボが法的に謳われていても、ミトロビツァ以南では、例えば、役所に掲げられている旗は、往々にしてコソボの国旗ではなく、隣国アルバニアの国旗であったりする。また、街の広場などには、UCKの戦士の銅像が必ずと言っていいほどある。国際空港の名前も、アテム・ヤシャリというUCKのリーダーの名前がついており、民族紛争の相手だった武装勢力と大アルバニア主義のシンボルをそこかしこで目にする状況では、警戒心や恐怖心が過去だけに由来するものとは、いえないだろう。

もっとも、当然、ミトロビツァ以南のアルバニア人が、北部に入ることも非常に恐怖が伴う。セルビア国旗は、セルビア本国とは比べ物にならないくらい密度で掲げられているし、警察も実質的には、セルビア警察であり、コソボ当局の施政は実質的に及んでおらず、警察に呼び止められるのは非常に恐怖を伴う。

行き来には、双方とも車を使うが、厄介なのは、ナンバープレートである。ミトロビツァ以北のセルビア系住民は、基本的にセルビア政府のKM（コソフスカ・ミトロビツァ）ナンバーや、セルビア本国のナンバープレートをつけている。ミトロビツァ以南の住民は、KS（コソボ）またはRKS（コソボ共和国）ナンバーをつけている。つまり、車のナンバーを見れば、帰属している民族が想像できてしまうのだ。（飛び地に住むセルビア系住民は、コソボ当局とセルビア当局双方に同じ車を登録し、ミトロビツァの橋を渡る際にプレートを取り替える。または、KSのナンバープレートを外す。筆者が滞在していた時期は、ミトロビツァ北部は、ナンバーがついていなくとも車で走行ができたのでこの2つのやり方があったが、現在は北部でプレート無しで走ることはできない。）

KSやRKSナンバーでミトロビツァ以北を走行することは、危険である。警察に頻繁に止められ、セルビア側で有効な書類を持っていないと、逮捕されることもあるし、街中で駐車すると、車を破壊されることもある。KMでミトロビツァ以南を走ることも同じ危険を伴う。現在は、セルビアとコソボの間の合意で、KS・RKSが北部に入るとき、KMが南部に入る時は、白いステッカーでローマ字部分をカバーするという合意が結ばれているが、どの程度の意味があるのかは疑問である。カバーしたプレートを見れば「向こう側から来た車」であることは一目瞭然だからだ。

分断の象徴 コソフスカ・ミトロビツァ/ミトロビツ

筆者は2008年～2011年の間、人道援助のプロジェクトを実施するためコソボに滞在していたが、その本拠地に使っていたのがコソフスカ・ミトロビツァ/ミトロビツという街であった。プロジェクトそのものについては、後述するが、ここでは、分断の象徴とも言えるコソフスカ・ミトロビツァ/ミトロビツという街について述べる。

コソフスカ・ミトロビツァ/ミトロビツは、旧ユーゴ時代には、鉛や亜鉛鉱山を中心に、コソボでも有数の栄えた街として有名だったが（そ

して、公害でも有名だった）、紛争後は、分断を象徴する街になっている。

コソボ紛争は、大規模な人口の移動を引き起こした。コソフスカ・ミトロビツァ／ミトロビツァはかつては、街全体にアルバニア人、セルビア人、ボシュニアク、トルコ人などが混住していたが、紛争は、その光景を一変させた。街の中心にイバル川という川が流れている。その川を

挟んで川以南には、主にアルバニア人が暮らし、川以北には主にセルビア人、ボシュニアク、ロマなどが暮らしている。（北の川沿いに小さなアルバニア人の居住地区もある。この地区は、KFOR警備の最重点エリアになっており、暴動や殺傷事件の多発地帯でもある。）

OSCEの2015年人口調査によれば、川以北の人口はセルビア人が22530人、アルバニア人が4900人、ボシュニアク1000人、ゴーラ人580人、トルコ人210人、ロマ200人、アシュカリ40人となっており圧倒の多数はセルビア人である。2011年の国勢調査によれば、川以南では、アルバニア人69497人、セルビア人14人、トルコ人518人、ボシュニアク416人、ロマ528人、アシュカリ647人、エジプト人6人、ゴーラ人23人となっており、圧倒の多数はアルバニア人である。いわば、アルバニア人を圧倒の多数者とするコソボ政府のコソボの端がイバル川以南のミトロビツァであり、セルビア人が圧倒の多数で、セルビア系の自治とセルビア本国の力が半々くらいの統治を行っているのがコソフスカ・ミトロビツァ以北であり、実質的に以北にはコソボ政府の統治力は及んでいない。イバル川がセルビア

ミトロビツァ市のセルビア人 多住地域とアルバニア人多住地域



(Open Streetmapより筆者作成)

系のコソボとアルバニア系のコソボが対峙する境界線となっている街である。

暴動や、殺傷事件もよく起きる。筆者は3年間滞在しただけだが、それでも5～6回は暴動に遭遇した。このエリアは、KFORにとっても、要注意エリアなので、情報は常に収集している。一般的には、例えば、戦争犯罪で誰かが訴追されたとか、コソボの地位をめぐる何らかの交渉があったとか、政治的な動きがあった際には、それに反発するデモや暴動が起きやすく、KFORも警備を厳重にする。しかし、全く予想外のことで暴動が起きることもある。筆者の滞在中にも、誰も警戒していない中で暴動が起きたこともあった。2010年には、セルビア対トルコのバスケットの試合で、セルビアが負けたことを、あざけるために、アルバニア系の若者が、橋の南側から北側へ投石を始め、暴動に発展した。この時は、北のセルビア側も、全く予想しておらず、暴動発生後数十分経過してから、警報を鳴らしていた。KFORも警察も、全く予想しておらず、橋を封鎖することもできず、最終的には、手製の爆弾まで使われるような惨事になった。

このような、民族間の対立感情が色濃いコソボで、筆者は2年間に亘って、多民族融和のためのプロジェクトを実施した。

第3章 コソボにおける多民族融和促進事業について

筆者は、2008年～2011年にかけて、日本のNPOがコソボで実施した多民族共生を目指すプロジェクトに携わった。本章では、3年間の中で、2009年～2011年に実施した多民族融和の促進を目指したプロジェクトについて、2010年度のプロジェクトを中心に概観する。(2008年に実施したプロジェクトは、職業訓練のプロジェクトなので、ここでは触れない。)

プロジェクトは、紛争や度重なる暴動の影響で、民族コミュニティ間の関係がほぼ断絶しているコソボにおいて、悪化した民族関係(主にセルビア系住民とアルバニア系住民の間)を改善することを大きな目的とした、合

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト（暉峻）

宿形式のワークショップを2009年度は9回、2010年度は13回、それぞれ実施した。

プロジェクトの目的

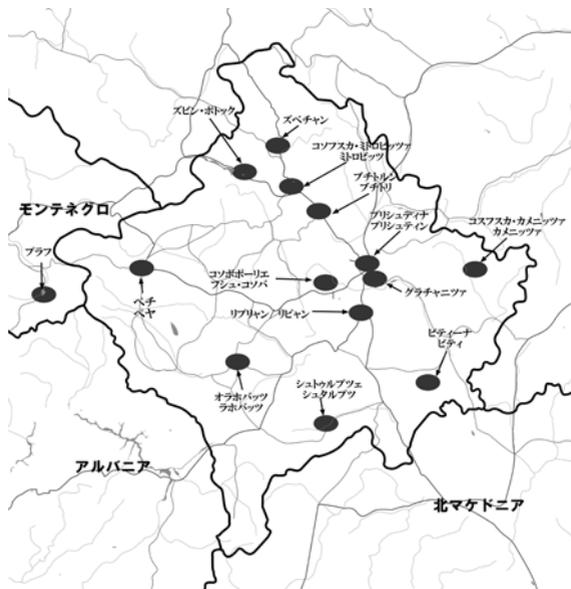
2010年度の事業は、混住地域や、セルビア系とアルバニア系のコミュニティが隣接している地域をターゲットとして、参加者を募り、将来に起こりうる民族間の暴力的な紛争を予防するための種を撒くために、(1)参加者自身で、多民族共存に向けた取り組みを行う意識が育まれること、(2)育まれた意識を行動に移す一形態として、多民族共存に資する自分たちの事業を計画しドナーにアプローチができるキャパシティを、参加者が身につけること、(3)紛争等により、断絶してしまった他民族とのネットワークを作る、または復活させること、(4)参加者がワークショップ期間中に作った事業企画や、またはワークショップ終了後に作った事業企画が将来実施されることで、多民族宥和が促進されることを目的として実施された。

実施の手順としては、まずターゲットとする地域を決め、それぞれの地域から参加者を募る。参加者を、事業地に連れてゆき、6日間合宿形式のワークショップを行う、ということをして、ターゲットとする事業対象地域の数だけ繰り返した。

合宿地と事業対象地について

2010年度の事業は、モンテネグロのプラフで合宿を行った。プラフは住民の大半がムスリム人で、その他、モンテネグロ人、アルバニア人などが暮らしている。また、隣の町にはアルバニア人の街もある。言語、宗教などのバランスを考えると、中立性の観点からベストの環境である。言語的には、セルビア系の参加者は、自分たちの言葉が通じる環境であり、宗教的には、ムスリムが多いアルバニア系の参加者は、礼拝に行く場所もそばにある環境でもある。

2009年度の当該事業においては、プリシュティナ以北を対象としていた



が、2010年度の事業では、コソボ全土をターゲットとした。事業対象地は、以下の12地域とした。

ズベチャン，ズビン・ポトック，コソフスカ・ミトロビツァ／ミトロビツツ，ペチ／ペヤ，プチトルン／プシトリ，シュトルプツェ／シュタルプツ，ゴソボ・ポーリエ／フシュ・コソバ，コソフスカ・カメニツァ／カメニツツァ，プリシュティン／グラチャニツツァ，リアリヤン／リピヤン，ビチーナ／ビティ，オラホバツツ／ラホバツツ

ローカルスタッフとアシスタント

2010年度の事業では、ローカルスタッフも、合宿を手伝ってくれるアシスタントも、基本的に過去の参加者から選んだ。特にローカルスタッフは、全員、セルビア語もアルバニア語も話せるスタッフと2009年の事業で出会

えたことは、非常に助けになった。また、合宿ごとに、過去の参加者の中から協力してくれる人を選び、アシスタントとして手伝ってもらった。ローカルスタッフとアシスタントで、それぞれ1人当たり3人程度の参加者に目が届けば良いような環境を作れたことは、事業の成功に非常に重要だった。この環境により、合宿の参加者同士で何か問題があった場合や、溶け込めない参加者などがいても、すぐに気がつくことができ、早めのケアができた。

合宿では何をしたのか

合宿は1回あたり5泊6日で行われ、12地域を対象に計13回行った。ブリシュティナ対象のワークショップは、コミュニティのサイズが大きい事から2回開催した。

ワークショップのスケジュールは、ラマダンやスラバなどの宗教的行事や、北部セルビア系コミュニティの選挙や、コソボ政府の選挙期間等を考慮し組み立てた。2010年度は、2009年度に比べると、暴動、爆破事件、ICJの判決内容等、色々と社会的に不安定な要素はあったが、結果としては、事業計画通りに全ての合宿を終えることができた。

合宿の内容について

合宿の内容は主に2つの視点を基に組み立てた。まず、現状では、セルビア系等の住民とアルバニア系住民の間での交流がほぼ断絶していることから、合宿において6日間一緒に過ごしながらか、グループワークを主体としたワークショップを通じて異なる民族からなる参加者同士を結びつけることである。第2に参加者が多民族共存に資する自分たちの事業を計画しドナーにアプローチができるキャパシティを、グループワークで実際にプロジェクトのプロポーザルを作りながら身につけることと、作ったプロポーザルを、将来的に実施まで漕ぎ着けることで、多民族宥和が促進されることである。コソボはヨーロッパでは最貧困地域といってもよく、失業

率は40%にもおぼり、コソボでの将来を思い描けない若者も多い。他方で、紛争後のコソボには、国連機関や、EU関連の機関、KFORなどの事務所が点在しており、規模の小さなコミュニティ開発のファンドは多い。もし、参加者が、合宿中に作ったプロポーザルに実現可能性を見出せば、自分たち自身の人件費を計上した上で、それらのファンドに応募をすれば、仕事を作り出すことにもなる。そして、将来的な実現可能性を見出せば、合宿が終わっても、民族間の交流は事業実現に向かって続くことにもなる。

以上2点を勧案して、合宿に取り入れられた内容は以下である。

1. 参加型の手法により、事業企画の方法、事業計画と予算の建て方、プロポーザルの書き方、プレゼンテーション等を学ぶ事業企画モジュール
2. セルビア語・ボスニア語を母語とする参加者、アルバニア語を母語とする参加者それぞれが自分たちで企画をし、言語を教え合うセルビア語・アルバニア語言語交換モジュール
3. 参加者それぞれが自分たちで、企画書、予算、プレゼンテーションを行えるだけのコンピュータスキルを教えるパソコンモジュール
4. 参加型の平和教育を実施することで、暴力的な紛争を避ける視点を持ち、平和構築への啓発を図る平和教育モジュール
5. 参加者が、自分自身について伝えたいことを伝える、自己表現モジュール

・事業企画モジュール

事業企画モジュールは、参加者を多民族混成の小グループに分け、4日間でそれぞれのグループが事業企画を立て、5日目に自分たちの事業計画のプレゼンを行う。毎日、授業はレクチャーの時間とグループワークの時間に分け、その日のレクチャーをグループワークで実践してゆくことで、内容を身につける。また、グループワークで事業計画を実践することで、異なる民族からなる参加者は、自然と自分たちが一緒に何ができるのかを

考えるようになる。何よりも、多民族の参加するプロジェクトのプロポーザルが、合宿に参加することでできることの意味は大きい。最終日には、グループで作ったプロポーザルを発表した。1つのグループが発表している時は、他のグループはドナー役となり、プレゼンが行われたあとに、質問、批判、討議を行った。これにより、民族ごとではない、連帯感も醸成された。

参加者を選ぶ際に、最も重視したのは、参加の動機と、多民族融和への意志であり、参加時点で各個人がもっている具体的なスキルには、大きな開きがあった。しかし、レクチャーとグループワークの組み合わせ、つまり、習うことと実践することを組み合わせて行ったこと、レクチャーも、実例を多く使い、なるべく一方通行のレクチャーにならないよう、参加者と常に意見や疑問のやり取りをしながら進めたことで、ついてゆけない参加者を出すことはなかった。加えて、当事業においては、ローカルスタッフ・ファシリテーターとともに、過去の参加者の中から選んでおり、モジュールがどのように進行してゆくのかを、全員でシェアできていた。また、前出のように参加者2～3人に1人、実施側の人員を割り当てていたことで、参加者一人一人に目が行き届いていたことも、参加者についてゆけなかったり、グループから外れてしまう参加者を生み出さなかった理由と考えられる。

• パソコンモジュール

パソコンモジュールは、事業企画に必要な、最低限のスキルを参加者につけることを第一の目的としているが、事業企画に必要なパソコンスキル自体が、MSワード、エクセル、パワーポイントという、社会で「つぶし」のきくスキルであることから、参加者が、当該モジュールのスキルを使い、将来の就業可能性を拓げることも、目的としていた。事業企画モジュールの項で触れたように、参加者の選定基準は、現状で参加希望者の持っているスキルではなく、参加の動機と、多民族融和への意志を重視したため、

参加者個々のMSオフィスの習熟度には、ばらつきがあった。そのため、現状のスキルが低い参加者に対しては、モジュールの時間外に別途、補習をするなどして対応した。基本的に、各日の講習・実習内容は、事業企画モジュールとリンクさせる形で行われた。

• 言語交換モジュール

セルビア/ボスニア語とアルバニア語の間には、他の旧ユーゴスラビア主要民族間のようなスラブ語系という共通点がない。現在では、旧ユーゴ時代と違い、学校教育の中でお互いの言語を教えていないため、若い世代の大半は、トルコ語からの借用語以外には、お互いの言葉を全く理解できない。従って言語交換モジュールで、4日間相手の言葉を習ったところで、会話が成立するようにはならない。このモジュールの目的は、言語を学ぶことそのものよりも、言語をお互いに教え合うことで、相手に対するポジティブな好奇心を養うことや、お互いの言葉を使つてのコミュニケーションのきっかけを参加者に提供することを目的とした。参加者の殆どは、人に言葉を教える、という経験自体が初めてのことだったため、セルビア/ボスニア語とアルバニア語のバイリンガルのファシリテーターやローカルスタッフの助けを借りながら、様々な方法でモジュールを組み立てていた。参加者たちは、お互いの言語に存在しない発音を教え合ったり、同じ単語を発見し合ったりと、楽しみながら進行させていた。両方の言葉の解る人や、セルビア語やアルバニア語の教師が参加することもあった。

• 平和教育モジュール

平和教育は、コソボの現況を鑑みて、教材やトピックは慎重に選んだ。暴力をどのように理解し、どのようなアプローチが平和に近づいてゆけるのかをテーマとし、このテーマに沿って、グループワークでみんなで考える、という方法をとったが、トピックとしては国家間の武力紛争や、政治的なものはさげ、参加者にとり身近だが、コソボにおける紛争は連想させ

ないものを選んだ。題材としては、参加者のジェンダーバランスがとれている場合は、ジェンダー差別を考えるワークショップや、簡単なストーリーを、グループワークで分析してもらうことで、平和学的な暴力概念を考えるワークなどを行った。グループワーク形式で授業を行ったこともあり、参加者同士で議論をしながら自分たちで理解を深めていた。特に、ジェンダーステレオタイプに関しては、セルビア人社会もアルバニア人社会も概ねマッチョかつ、保守的であることもあり、女性の参加者は、この授業をきっかけに、ワークショップへの参加態度がアクティブになるケースが目立った。意図していたわけではないが、このモジュールにより、往々として、同じ民族としての連帯感のみから抜け出し、同じ性別としての連帯感が醸し出されていた。

・自己表現モジュール

合宿で、同じ部屋で過ごし、一緒にご飯を食べるとはいつでも、期間は5日間と短いため、参加者全てが打ち解けることはできない。このモジュールは、短い期間の穴埋めと、参加者が自由に話せる空気を作るために設定した。参加者それぞれは、20分間の持ち時間があり、コソボの地位問題や、政治に関することを除けば、自分自身についてなんでも話しても良い。各参加者のプレゼンの後に、他の参加者による質問やコメントの時間を設け、プレゼンが一方通行にならないように配慮をした。殆どの参加者は、プレゼンに慣れておらず、前日眠れなかった者、プレゼン中に泣き出してしまふ者などが散見されたが、それらのアクシデントも、結果としては、参加者同士で慰め合うなど、お互いの距離を縮めることに一役買ったのと同様に、他の参加者に対する共感を育むことにも一役買っていた。

事業の成果

参加者は、初日こそ、お互いに探り合い、民族のグループ毎に固まりがちで、活発なコミュニケーションは見られないこともあったが、ワーク

ショップを合宿形式としたことにより、共に過ごしながら、事業企画を共同で立ててゆくうちに、お互いのコミュニティが抱える問題に、実はかなりの共通点がある事、お互いの生活スタイルの共通点などに気づいてゆき、徐々にお互いコミュニケーションをとるようになっていった。コソボの社会において一般的であるかどうかは別として、本事業の参加者についていえば、お互い他民族の住民が普段どのような生活を送っているのか、大きな好奇心を抱いていた場合が多かったことも、ワークショップ期間中に、積極的なコミュニケーションが見られた一因と言えるだろう。さらに、参加者の10%程は、他民族と、日常生活において普通に付き合うのが当たり前であった旧ユーゴスラビア世代であったこともポジティブな影響をもたらした。これらの旧ユーゴスラビア世代の参加者は、自己表現モジュールや言語交換モジュール等の授業だけでなく、合宿生活の中で、民族間が断絶していなかった時代の経験を、参加者たちと共有する等して、積極的に、民族間のコミュニケーションの橋渡しをする役割を担ってくれた場合が多かった。

ワークショップ中に培った事業計画のスキルと、参加者同士の人脈を利用し、ワークショップ中に立てた事業計画、もしくは、ワークショップ終了後、参加者同士で新しい事業計画を立て、その実施に向けての動きも出ており、助成金を取って事業の実施に漕ぎ着けたグループもあった。

また、合宿とは直接関係はないが、参加者による、心温まるような出来事もいくつかあった。

筆者の誕生日には、アルバニア系の参加者とセルビア系の参加者たちが、連絡を取り合い、誕生日会もどきを企画してくれ、セルビア系の参加者も、わざわざコソフスカ・ミトロビツァ／ミトロビツ南部までお祝いに来てくれた。筆者にとっては、もちろん、とても嬉しい驚きであっただけでなく、当日その場にいたKFORの兵士や、西欧の記者も大変驚いていた。

当事業は、ワークショップを通じた、多民族宥和促進という、成果が目に見えにくい性質の事業であるため、参加者へのインタビュー、ワーク

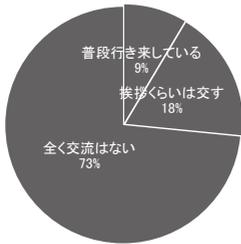
コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト (暉峻)

ワークショップ期間中の面接、ワークショップ終了後のインタビュー等により、可能な限り、事業の効果が目に見えるように心掛けた。

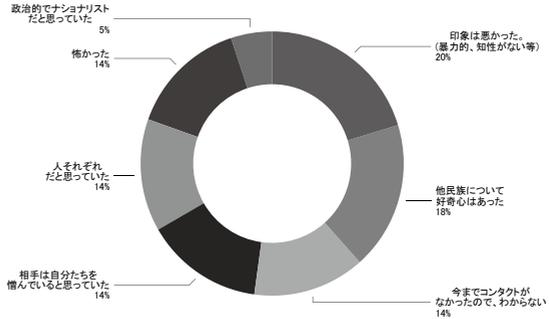
参加希望者への事前インタビュー、ワークショップ中、ワークショップ後のモニタリングの結果は以下である。原則的に、面接形式の聞き取りによりモニタリングを行ったため、参加者の答えは、少しずつは違うが、集計の過程で類似する答えは類型化した。

結果として、上記のように参加前と参加後には大きな変化が見られた。

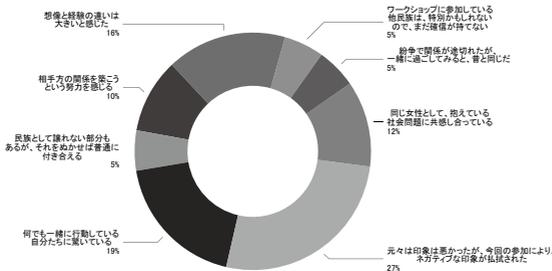
参加前のセルビア系の参加者とアルバニア系の参加者の相手方民族との交流頻度



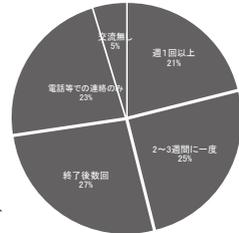
参加前のセルビア系の参加者とアルバニア系の参加者の相手方民族への印象



参加後のセルビア系の参加者とアルバニア系の参加者のお互いへの印象



参加後のセルビア系の参加者とアルバニア系の参加者の交流頻度



参加者は、「向こう側」の参加者のことを、よく冗談で「君のことは知っている。前に暴動の時に石を投げ合ったから」といったりしていたが、石を投げる向こう側にいる顔を想像できるようになることは、将来の暴力的な紛争を防ぐ一定の歯止めにはなるだろう。

むすびに代えて：この事業がやろうとしたことと、 北東アジアの平和

平和の建設とは、1つ1つの細かいことを根気よく積み重ねて行くしかない。しかし、どんなに根気よく、積み重ねても、ちょっとしたきっかけがあれば、積み上げた平和の建設は一瞬で崩れ落ちる。その意味で、このプロジェクトが何かを「成し遂げた」とはとてもいえない。しかし、少なくとも、この事業がやろうとしたこと、積み上げた成果はある。

大きくいえば、この事業はアイデンティティ（帰属意識）の、変化を促すものである。民族紛争後の社会では、どうしても、一番表面にあり、かつ最大の「我々意識」は、民族になってしまいがちである。民族紛争や、他民族に対する暴動や迫害といった暴力的な事象は、そこに暮らす人に常に、自分はどの集団（民族）のメンバーなのかを意識させ、暮らす人々を、正しく被害者の我々民族と、その我々を害する「奴ら」他民族に分けてしまいがちである。そうしたマインドセットは、次の暴力的な事象を起こりやすくし、憎悪の悪循環に人々を陥らせてゆく。

このプロジェクトは、民族紛争後の社会について見落としてしまいがちな、別の「我々」意識を仄めかすものである。参加者は合宿が始まった当初は、民族としての我々・我意識のみにとらわれがちだったが、共に過ごすうちに、別の我々意識が芽生えた。前出の性差別を受ける女性という我々だったり、地域の我々だったりもする。これらの我々意識は、もちろん民族意識に置き換わるものではないし、民族意識を超えるものにもならないかもしれない。しかし、少なくとも、他の我々意識は、民族意識を相対化させ

コソボ紛争と多民族融和事業から見る平和建設のためのアイデンティティシフト (暉峻)

てくれる。それだけでも、大きな意味のある仄めかしではないだろうか。

ハンス・コーンの提起するところの東欧型のナショナリズムが覆い尽くしている感もある今の世界、私たちの暮らす日本社会はどうだろうか。ユーゴ紛争は、私たち日本社会にも問いかけている。「反日」という言葉が、政権を担う政治家により普通に使用され、無批判に流通する現在、「日本はすごい」と褒め称えるテレビ番組の氾濫する現在、民族的少数者、移住者への憎悪表現や、ジェンダー差別などレイシズムに「寛容」な現在の社会、狭量な「日本人」という我々意識を超えて、私たちは、どんな我々を構築してゆけるのだろうか。様々な属性の人々が暮らす地域に暮らす我々、東アジアに暮らすメンバーとしての我々など、平和を建設してゆくための、様々なアイデンティティ構築の必要性を、コソボ紛争と紛争後の社会は示唆してくれている。

参考文献

- ・ KOHN, Hans (1944) 「The Idea of Nationalism」 Collier Books.
- ・ KOHN, Hans (1965) 「Nationalism Its Meaning and History」 D. Van Nostrand Company. 佐々木毅・木村靖二・長尾龍一訳 (1988) 「国家への視座」所収ハンス・コーン「ナショナリズム」, 平凡社。
- ・ KOHN, Hans (1948) 「The Idea of Nationalism. A study in 1st origins and background」, Routledge.
- ・ ARANAS, Paul F. J. Aranas (2012) 「Smokescreen: The US, NATO and the Illegitimate Use of Force」 Algora Publishing.
- ・ 千田善 (1999) 「ユーゴ紛争はなぜ長期化したか——悲劇を大きくさせた欧米諸国の責任」 勁草書房。
- ・ 千田善 (1993) 「ユーゴ紛争——多民族・モザイク国家の悲劇」 講談社現代新書。
- ・ 岩田昌征 (1999) 「ユーゴスラヴィア多民族戦争の情報像」 御茶の水書房。
- ・ 岩田昌征 (1994) 「衝突する歴史と抗争する文明 ユーゴスラヴィア」 NTT 出版。
- ・ 柴宜弘 (1996) 「ユーゴスラヴィア現代史」 岩波新書。
- ・ 月村太郎 (2013) 「民族紛争」 岩波新書。
- ・ BENDERLY, Jill & KRAFT Evan (1996) 「Independent Slovenia: Origins,

- Movements] Prospects, St. Martin's Press.
- ・ COHEN, Lenard J (1995) 「Broken Bonds: Yugoslavia's Disintegration and Balkan Politics in Transition」 Westview Press.
 - ・ DRAGNICH, Alex N (1995) 「Yugoslavia's Disintegration and the Struggle for Truth」 Columbia University Press.
 - ・ GLENNY, Misha (1992) 「The Fall of Yugoslavia: the Third Balkan War」 Penguin.
 - ・ GLENNY, Misha (1999) 「The Balkans 1804 - 1999: Nationalism, War and the Great Powers」 Granta Books.
 - ・ HANSEN, Lene (1993) 「Working Paper 14:1993: Slovenian Identity: State Building on the Balkan Border」 Centre for Peace and Conflict Research.
 - ・ HEUVEL Martin van den/ SICCAMA, Jan G. (1992) 「The disintegration of Yugoslavia」 Rodopi.
 - ・ LOKAR, Sonja (2004) 「A Short History of Quotas in Slovenia」 the International Institute for Democracy and Electoral Assistance.
 - ・ (IDEA)
 - ・ RAMET, Sabrina P (2002) 「Balkan Babel: The Disintegration of Yugoslavia from the Death of Tito to the fall of Milosevic」 Westview.
 - ・ SILLBER, Laura & LITELE Allan (1996) 「The Death of Yugoslavia」 Penguin.
 - ・ SOCAN Lojze (1989) 「EC - Yugoslavia: System and Policy Campatibility」 Institute for Economic Research Ljubljana.
 - ・ IVANOVIC, Zivota (1995) 「Media Warfare: The Serbs in Focus」 CIP-Katalogizacija u Publikaciji Naroda Biblioteka Srbije.

(川崎市平和館 専門調査員, 本学・駒沢大学講師)